

第28回 岡山リウマチ研究会

日 時：平成9年3月22日（土）15：30～

場 所：岡山プラザホテル5 F延養の間

世話人：槇 野 博 史

（平成9年6月16日受稿）

【一 般 演 題】

1. 悪性関節リウマチの2例 — Bywaters 型と Bevens 型 —

尾道市立市民病院内科	吉 永 泰 彦	西 井 伸 洋	橋 本 尚 子
	橋 本 昌 美	田 頭 誠	山 脇 泰 秀
	藤 野 寿 幸	松 本 光 仁	
同 整形外科	高 杉 茂 樹	浦 上 征 男	

悪性関節リウマチ（MRA）の2例を経験し、救命出来なかったのが、反省を込めて以下に報告する。

症例1は68歳女性で、RA 発症18年後に指趾壊疽、多発性神経炎を併発した末梢性動脈炎（Bywaters）型。ステロイド・パルス、メソトレキサート、二重濾過血漿交換療法が有効であったが、入院10ヵ月後に難治性褥瘡の感染から敗血症を生じて死亡した。Bywaters 型の治療にあたっては、褥瘡感染の防止が重要と思われた。

症例2は66歳男性で、RA 発症2年後、通院

治療中断1ヵ月後に、脳梗塞、肺線維症、胸膜炎を生じた全身性動脈炎（Bevens）型。人工呼吸器管理下に、合併する肺炎に対して抗生剤を投与しながら、ミニパルスを含むステロイド療法を施行し、リウマトイド因子の低下、低補体血症の改善を認めたが、呼吸不全が続き、入院2ヵ月後に死亡した。RA 治療の中断による免疫異常の rebound が、MRA の発症に関与している可能性が推察され、継続した RA 治療の必要性を痛感した。

2. 当院における RA 患者の現状と治療について（心身医学的考察を加えて）

中国中央病院内科	黒 田 広 生	中 尾 一 志	出 口 静 吾
	石 井 啓 太	小 栗 栖 千 雅	岡 崎 守 宏
	張 田 信 吾	宮 田 明	菊 地 武 志
	長 田 高 寿		
同 整形外科	大 石 豪 彦	池 田 隆 浩	

当院で治療中の RA 患者247名（男性44名、女性203名）について検討した。年齢分布は60代をピークに、70代、40代、50代の順であった。60歳以上の高齢者の比率は58%で、高齢化が進

んでいた。発症年齢分布は、50代をピークに60代と40代が同率で、高齢での発症率は32%であった。平成8年度の早期 RA 患者26名の男女比は1：2.7で、高齢者率は42%、その男女比は1：

1.8となり、高齢者では男性の発症率の増加が顕著であった。治療薬として、単剤療法では SASP、金製剤、MTX の順に、併用療法では SASP、MTX、MZB の順に使用頻度が高かった。

心身医学的検討では、男性は女性に比べスト

レス耐性が弱く、さらに高齢者ほど生きがい観を喪失しやすい傾向にあるため、RA 患者の治療には心身医学的アプローチが不可欠であり、男性と高齢者には特に重視されるべきであると考えた。

3. 慢性関節リウマチに対するブシラミンの使用経験

高知県立安芸病院整形外科 山 川 晴 吾 市 川 徳 和 玉 田 利 徳
同 内科 宇 都 宮 俊 裕 川 田 光 顕

慢性関節リウマチに対してブシラミンを第一選択剤として使用した症例について調査したので報告する。

【対象】当科で診断された未治療の RA 患者でブシラミンを第一選択剤として使用した症例で全18例（男性6例、女性12例）、年齢は19～84歳（平均64.5歳）、Stage 1 12例、Stage 2 2例、Stage 3 4例、Class 1 6例、Class 2 8例、Class 3 4例であった。

【結果】全般改善度は改善6例（33.3%）、軽度改善7例（39.0%）、不変5例（27.7%）で悪化した症例はなかった。副作用のため投与中止に至った症例は5例であった。副作用は粘膜・皮膚症状が大半を占めていた。赤沈、CRPなどは3ヵ月の時点で改善傾向をしめしており、免疫グロブリンも統計学的有意差はIgMにのみ認められたものの全般に低下傾向を示した。

4. 人工肘関節の中期成績

岡山市立市民病院整形外科 佐 藤 理 小 浦 宏 清 水 弘 毅
藤 井 俊 宏 渡 辺 唯 志

【目的】今回、われわれは高度に破壊された RA 5例5肘に対して人工肘関節置換術（以下 TEA と略す）を施行し中期ではあるが比較的良好な結果を得たので報告する。

【対象および方法】RA 5例5肘で、性別は男性1例、女性4例で、手術時年齢は48歳～76歳、平均61.8歳であった。X線所見は、Larsen の分類で全例 grade 4 で、経過観察期間は3年～11年10ヵ月、平均5年6ヵ月であった。

【結果および考察】術前後の機能評価は、日整会肘機能評価法（以下 JOA score と略す）を用いて検討した。使用した人工関節機種は、京セラ1型ステム付を使用したものが3例、Schlein型を使用したものが2例であった。内、京セラステム付セメント固定により置換した3例での JOA score は平均40.1点から75点に改善した。RA における肘関節障害に対して適応を選べば TEA は良い再建法の一つになると考えられた。

5. RA 足関節固定術（Wagner 法）の術後成績

岡山大学整形外科 宮 本 宣 義 臼 井 正 明 小 林 豊
千 田 益 生 井 上 一

慢性関節リウマチ（以下 RA と略す）における足関節破壊に対する足関節固定術（Wagner 法）の成績を報告した。

対象は当科で施行した RA 患者に対する足関

節固定術で8例9関節（男1例1関節、女7例8関節）であった。手術平均年齢は平均61歳、RA 罹病期間は平均24年で全例 stage 4, class 3であった。術前のX線検査では、すべて Larsen

分類 grade 5 で強い骨破壊を認めた。術後平均 5.2 週で体重負荷が可能となり、術後平均 4.2 ヶ月で全例に骨癒合が得られた。臨床評価点は Moran の評価法にて術前平均 44 点が最終調査時

平均 80 点に改善し歩行時痛を訴える者はなかった。Wagner 法による足関節固定術は、強固な固定力により早期体重負荷が可能で、確実に骨癒合が得られ有効な治療法であった。

6. 妊娠を希望し来院した初発 RA の 1 例

岡山市立市民病院内科 小 橋 秀 廣 前 田 俊 章
同 整形外科 小 浦 宏 渡 辺 唯 志

【症例】37歳、主訴：多関節痛。現病歴：1991年頃に RA 反応陽性。92年12月末より両膝関節痛。93年1月、両足痛、2月両肩痛、右肩の挙上困難、3月頃から朝の手のこわばり、両手首の痛み、両顎関節痛、開口困難。93年6月当院受診。既往歴：92年11月末より甲状腺機能低下症、不妊症の治療、排卵誘発剤を服用中。家族歴：母 RA、検査 ESR 10mm/25mm, RF 86.6IU/ml, OKT3 79.5%, OKT4 52.8% と増加、腫脹関節数 3、疼痛関節数 7、RA と診断。プレドニゾロン (P) (30mg より漸減)、D-ペニシラミン

(D-P) (100mg) の併用投与、症状急速に改善、リウマチ反応陰性化。94年3月 SS2M で治療中止、5月症状は増悪し、CRP、ESR、リウマチ反応も陽性、P 5mg より開始。94年10月正常児分娩、後、症状は増悪し、D-P 併用、効果不十分にて、更に MTX 併用し改善。リウマチ反応陰性化、疼痛 0、腫脹 2 (非活動性の滑膜肥厚)。4年3ヵ月経過し stage I, class I。早期から P を含む多剤併用療法が RA の予後に良好な結果をもたらせたと考える。

7. Jaccoud's Arthritis を合併した SLE の 4 症例

岡山大学医学部第三内科 川 中 紀 邦 山 村 昌 弘 岡 本 英 之
原 田 誠 之 守 田 吉 孝 河 島 昌 典
相 田 哲 史 槇 野 博 史

Jaccoud's Arthritis は、SLE などの膠原病に合併する非びらん性の関節変形である。我々は Jaccoud 変形を合併した SLE 4 症例を経験したので報告した。

【症例 1】41歳女性。18年前に関節炎で発症し、10年前に蝶形紅斑、口腔内潰瘍、精神症状とともに抗核抗体陽性、抗 DNA 抗体高値、白血球減少、血小板減少、蛋白尿を認め SLE と診断。

【症例 2】27歳女性。12年前に関節炎、9年前に紅斑、口腔内潰瘍、心膜炎が出現し、抗核抗体陽性、抗 DNA 抗体高値、白血球減少を認め

SLE と診断。【症例 3】27歳女性。12年前に関節炎、5年前に心膜炎、抗核抗体陽性、抗 DNA 抗体高値、白血球減少、蛋白尿を認め、SLE と診断。【症例 4】60歳女性。20年前に関節炎出現。1年前にネフローゼ症候群、抗核抗体陽性、抗 DNA 抗体高値、白血球減少を認め SLE と診断。(結論) いずれの症例も慢性化に伴い RA 類似の強い変形を示していたが、X線写真上、骨びらん、骨破壊像は認めなかった。骨びらんの有無は SLE と RA の重要な鑑別点である。

8. 当院における岡山大式 PCL-R 型人工膝関節置換術の術後成績

倉敷廣済病院整形外科 川 上 和 秀 檀 浦 智 幸
香川労災病院整形外科 横 山 良 樹

【目的】当院にて慢性関節リウマチ (以下 RA とする) 患者に施行した岡山大式 PCL-R 型人

工膝関節置換術の短期術後成績につき検討した。

【方法】術後1年以上経過観察可能であったRA患者38例55関節，手術時平均年齢57.9歳，術後平均追跡3.0年（1～6.4年）を対象とした。【結果】JOA scoreは，術前平均40.8点が，術後および調査時，81.4点，80.7点と改善していた。合併症として，脳卒中後寝たきりとなった患者

の1関節に遅発性感染症をきたし，また，脛骨板の非感染性ゆるみのため1例2関節に再置換術を施行した。【結論】再置換術を施行した以外の症例では，特に，疼痛の消失と歩行能力の向上がみられ，概ねADLの改善に役立ち良好な成績が得られていた。

9. 20歳代で両膝 TKA 施行後，長期観察中の RA の1例

倉敷市立児島市民病院整形外科 三宅孝弘 栗生雅人 光吉五郎

症例は現在44歳の女性で，18歳時にRAを発症し，諸所で治療を受けるも，次第に両膝の疼痛，変形などのため歩行困難となり，27歳時に両膝人工関節置換術（岡山大式 Mark-II）を施行し，T字杖歩行可能となった。ついで，34歳時に右強直肘に対し人工肘関節置換術，さらに36歳時に左股関節障害に対して人工関節置換術（Harris.B.H.P）も施行している。今回のFollow-upで，膝関節や股関節の機能評価（股：

日整会，膝：三大学私案）をしてみると，膝関節では左右とも術前15点が術後16年7ヵ月及び10ヵ月の現在，ともに75点，左股関節では術前41点が術後8年の現在77点で，屋外は片杖歩行，屋内は独歩も可能と良好な機能が維持されていた。また，右人工肘関節は，術後10年でROMは75度～145度，前腕回内60度，回外70度で，摂食，整容，車の運転などのADLに十分貢献していた。

10. 鏡視下滑膜切除術を行った RA 膝における MRI の検討

岡山大学整形外科 加藤泰之 臼井正明 柴原基
井上一
岡山県立大学短期大学部 太田祐介
倉敷廣済病院整形外科 川上和秀

鏡視下滑膜切除術を行ったRA膝の術前，術後の非造影MRIにおいて，滑膜量と骨の中の病変（骨内病変）の変化を検討した。対象は男性3例3膝，女性16例19膝，手術時年齢は平均59.4歳，罹患期間は平均6年11ヵ月，追跡期間は平均1年7ヵ月，術前のX線像はLarsen-Dale分類（X線grade）でgrade I：5膝，II：11膝，III：3膝，IV：3膝であった。滑膜量は竹内の方法（MRI評価点）により9点満点で評価し，骨内病変は太田の報告によりBone-bruise

様型（B型）とErosion型（E型）について検討した。追跡時のMRI評価点が5点以下の群では，臨床症状の改善度が高く，X線gradeの進行が少なく骨内病変の消失が多くなり，追跡時のCRPが低くなる傾向を，追跡時のMRI評価点が6点以上の群では逆の傾向を認めた。骨内病変のX線gradeの進行に対する影響は，B型は小さくE型は大きかった。B型の存在とE型の出現は臨床症状の悪化要因となった。

11. RA との重複症候群についての検討

倉敷成人病センター南倉敷病院 光中弘毅 宮脇昌二

複数の膠原病疾患を合併することを重複症候群と言うが，中でも今回我々はRAとの重複症

候群についての検討を行った。

まずRA+SLEについて年齢は40～47歳の3

症例でいずれも女性。初発症状は多関節痛と蝶型紅斑。発症年齢は RA 先発, SLE 先発とも 1 例ずつで、同時が 1 例だった。抗核抗体は DNA, RNP, SS-A/Ro が陽性であった。RA の stage, class は II 以上で、治療は少量の PSL と MTX が使われている。

RA + PM は 47 歳女性で初発症状は多関節痛。発症年齢は RA 先発で、抗核抗体は Jo1, ACA が陽性であった。RA の stage は III, class は II で、治療は少量の PSL と MTX が使われている。

RA + PSS について年齢は 44~63 歳の 5 症例

でいずれも女性。初発症状は膝関節痛とレイノー現象。発症年齢は RA 先発 1 例, PSS 先発 1 例で、同時が 3 例だった。抗核抗体は全例 topo-I が陽性であった。RA の stage, class は II 以上で、治療は少量の PSL と MTX, DPC, SASP が使われている。最後に RA + MCTD について年齢は 25~44 歳の 5 症例でいずれも女性。初発症状は多関節痛とレイノー現象。発症年齢は MCTD 先発 1 例で、同時が 4 例だった。抗核抗体は DNA, RNP, SS-A/Ro が陽性であった。RA の stage, class は II 以下が多く、治療は少量の PSL と MTX が使われている。

12. 縦隔気腫とホルネル症候群を伴った皮膚筋炎と RA との overlap 症候群の 1 例

倉敷廣済病院内科 宗田 憲治 栗田 将光 近藤 厚生
江澤 香代 三浦 孝子 原田 誠之
江澤 和彦

46 歳男性。1987 年 RA 発症。1994 年 10 月から翌年 3 月まで、間質性肺炎・皮膚筋炎のため、他院にて PSL 治療を受けていたが、同年 4 月当科受診され縦隔気腫を認めた。その後、PSL 減量中、同年 9 月より、乾性咳嗽増強し、左前腕部に膿瘍形成・発熱も伴うため入院となる。この頃より、右眼瞼下垂・縮瞳を認めた。両下肺野優位の間質性変化と縦隔気腫の拡大、皮下

気腫を認めたが、PSL, D-peni, mizoribine の併用治療にて軽快した。

一般に、膠原病の中で、縦隔気腫を合併した症例は皮膚筋炎に圧倒的に多く、皮膚筋炎に特異的な合併症の可能性が考えられている。ホルネル症候群も合併した報告はなく興味ある症例と思われたので報告する。

13. 多発性筋炎 (PM) と重複した RA の二症例の検討

中国中央病院内科 中尾 一志 黒田 広生 出口 静吾
石井 啓太 小栗 栖千雅 岡崎 守宏
張田 信吾 宮田 明 菊地 武志
長田 高寿

複数の膠原病が重複する overlap 症候群には種々の組み合わせがある。その中で、全身性エリテマトーデス (SLE) や進行性全身性皮膚硬化症 (PSS) および多発性筋炎/皮膚筋炎 (PM/DM) を中心とする重複例は多いが、慢性関節リウマチ (RA) と PM/DM の合併例の報告は、本邦ではいまだ 15 例にすぎない。今回我々は PM と RA の重複した非常に稀な 2 例を経験した。1 例は RA の経過中にリウマチ肺の急性増悪によると思われる間質性肺炎を併発し、その後 PM

を重複した症例であった。他の 1 例は PM が先行しその寛解の後に RA を重複した症例であり、PM と RA の重複例で PM が先行した症例は、我々が検索した限りでは本邦では 1 例の報告があるにすぎなかった。

RA と PM/DM の合併は稀であり単なる偶然的合併とする報告もある。しかし、全例が中高年の女性で、さらにほとんどの症例で肺病変を合併しているなどの臨床的な共通所見もあり、何らかの共通する免疫学的基盤があることが推

測される。今回提示した2例は、両疾患の overlap 症候群の理解を深め、相互の関連性を究明する

上で非常に興味深い症例であると考えられたので、文献的考察を加えて報告した。

14. THA 後に頻回に脱臼を繰り返した RA の一例

川崎医科大学整形外科 大西 亨 今井 義之 長谷川 徹
井上 猛 三河 義弘 渡辺 良
岡村一心堂病院整形外科 山岡 稔 生

【症例】56歳女性 RA Stage IV, Class III. 自宅にて転倒し左大腿骨頸部骨折 (Garden Stage IV) を受傷。当科入院となる。

【経過】受傷7日後に THA を施行、術中に頸部骨切り部の短縮を生じた。術後20日目に初回脱臼、以後計5回の脱臼を繰り返した。いずれも後方脱臼であり、患肢内旋屈曲位の不良肢位

をとった場合に起っていた。最終的には hip spica cast により再脱臼を防止できた。

【考察】脱臼の原因としてコンポーネントの設置位置異常および下肢筋力低下による不良肢位が原因と考えられた。患者教育と軟部組織に対する処置を行い再置換術を施行する事なく再脱臼を防止することが可能であった。

15. RA 股関節における geode の合併症について

岡山県立大学短期大学部 太田 裕介
岡山大学整形外科 阿部 信寛 横井 正 臼井 正明
井上 一

慢性関節リウマチ (RA) の股関節に認めた geode (巨大嚢腫状骨破壊) の合併症を中心に検討した。岡山大学整形外科で1983年以降13年間に人工股関節置換術を受けた RA の患者104例中、術前の股関節の状態が検討可能であった90例174股 (非手術側を含む) を対象とした。32例40股 (23%) に直径10mm 以上の geode を認め、男4例6股、女28例34股、右17股、左23股で、平均年齢59.6歳、平均罹病期間は14.7年であった。stage 1~4 が各々1, 3, 11, 25関節、股

関節 Larsen 分類で grade 1~5 が各々12, 6, 6, 6, 10関節、発生部位は大腿骨頸部外側が31股 (78%) と多数でした。股関節痛が geode 発見前よりあった例では X 線 grade が4, 5に進行例で、geode 発見後に股関節痛が出現した例では X 線 grade が1, 2の早期例である傾向が強かった。geode が大腿骨頸部の直径に占める割合が50%を超える8股中2股に病的骨折を認めた。また、発見後7年で X 線透過性が減少し、骨に置換したと推測された例が1股あった。

16. Cimetidine が著効を示した石灰沈着症

香川労災病院整形外科 横山 良樹 東野 みどり 羽崎 秀治
大澤 誠也 槌田 典平 高田 敏也

【目的】H₂ブロッカーである Cimetidine は抗潰瘍剤としてよく知られているが、透析患者の石灰沈着症に有効という報告が散見される。今回、我々は透析患者以外で関節周囲に石灰沈着を伴った症例に投与し、良好な成績を得たので報告する。【方法】対象は1996年1月~11月に経験した9例10関節で男4例女5例、部位別では

手関節5関節、肩関節4関節、第1足趾 MP 関節1関節であり、平均年齢54.7歳 (13~85歳)、疼痛発症から受診までの期間は平均2.9日 (1~7日) であった。治療は、NSAIDs・ステロイド関注などの併用は行わず Cimetidine のみを1日200mg~400mg 投与した。【結果及び考察】疼痛の軽快または消失までの期間は平均7.3日 (2

～14日), X線上の石灰沈着は, 1 週後消失 3 関節, 縮小 2 関節, 2 週後消失 1 関節, 縮小 4 関節で, 全例 2 週以内に効果がみられた。Cimetidine が上皮小体に作用し Ca 代謝に対し

て何らかの影響するとの報告もあるが, 関節周囲の石灰沈着に対する作用機序は不明である。しかしながら, 今回の臨床結果より本剤が関節周囲の石灰沈着に有効であった。

【特 別 講 演】

リウマチの診断と治療 —最近の話題を中心として—

埼玉医科大学総合医療センター第二内科 安倍 達

本年 9 月 1 日からリウマチ科が標榜科目として許可され, 医療広告が可能となった。ここでいうリウマチ科とは慢性関節リウマチ (RA) など関節に疼痛, 腫脹などの障害をきたす疾患を対象とする診療科のことである。したがってここでいうリウマチ科は広義のリウマチを指している。

本日お話しするリウマチはそのような広義のものを指している。その中から幾つかの疾患を取り上げ, 最近の話題を紹介する。

1) 早期 RA の診断とその治療

早期 RA の診断は医師によってかなり違っている。RA の病態である多発性関節炎, 罹病期間, リウマトイド因子陽性ということを利用して独自の方法によっていることが多い。そのどれが最も意味あるものかは明らかでないが, RA

を早期に診断し, 早期から治療することはその転帰が改善される可能性を持っているので大切である。

2) これからの非ステロイド抗炎症例 (NSAID)

NSAID による胃潰瘍が近年臨床上大きな問題となっている。今後は炎症に直接関係する COX II の選択的抑制剤の開発が進められることになる。

3) 単クローン性抗体による RA の治療

抗 TNF α モノクローナル抗体による RA の治療を自験例で示す。

4) シェーグレン症候群の病態

シェーグレン症候群ではなぜ組織障害性リンパ球を排除できないのか, ということを教室のデータから探る。